

うわさが実現することが感情及び行動に及ぼす影響¹⁾

——「白紙物語」が現実になるとき——

長谷川凜人*・三浦 麻子**

抄録：本研究の目的は、不安を喚起させるようなうわさの内容と類似する状況に遭遇した際の、個人の感情状態の変化とそのうわさの伝達意図について、実験室実験により探索的に検討することであった。47名の参加者は、不安を喚起させるようなうわさが記述された物語（統制群：「トイレのカギ」、実験群：「白紙物語」）を読んだ後に事後調査に回答し、その際に途中から質問紙が白紙になるような状況を設定した。脈拍数、そのうわさの伝達意図、状態不安尺度得点を群間で比較したところ、脈拍数は両群で差がなかったが、伝達意図は実験群が統制群に比べて高い傾向を示し、状態不安尺度得点は実験群が統制群に比べて高かった。不安を喚起させるようなうわさの内容に類似する状況への遭遇は、個人をより不安にさせ、伝達意図を高める可能性が示された。ただし、質問紙への白紙混入を実験者に申告するまでの時間は実験群が統制群に比べて長い傾向を示し、伝達意図との相関は正であった。得られた結果をふまえ、本研究の問題点と今後の展望について議論した。

キーワード：うわさ、うわさの実現、伝達意図、不安

1. うわさの社会心理学

うわさが実現するとき

人間はコミュニケーションの一環としてうわさ話をする。その目的は情報を交換する、話の内容を楽しむ、情報の共有で集団の絆を深めるなどさまざまである。単に話としてうわさに遭遇するだけでなく、うわさと類似する状況に遭遇して驚く場合もある。例えば、ただマスクを着けた女性を見るだけでは、不安になったりその場から逃げ出したいくなることはないのに、「口裂け女」のうわさを聞いた後にマスクを着けた女性を道端で見ると、うわさの内容を思い出して驚いたり、不安になったりするだろう。「口裂け女」の話って本当かもよ！」と誰かに伝えたくなくなったり、その場から逃げ出したいくなるかもしれない。前述のような感情や行動は、マスクを着けた女性に会う前に「口裂け女」の話を知り、会った時にそれを想起したからこそ誘発されるのだと考えられる。

そこで本研究では、うわさの内容に類似する状況に遭遇することが、個人の心理状態及び行動にどのように影響するかを探索的に検討する。ここではまず、うわさに関する社会心理学研究をレビューすることを通して、本研究で注目するうわさが持つ特徴と、研究に着手する際に注目すべき変数を明確にする。

うわさの分類

社会心理学において、うわさは数多くの研究が取り上げてきたテーマである。例えば川上（1997）はうわさを3つの種類-「社会情報としてのうわさ」「おしゃべりとしてのうわさ」「楽しみとしてのうわさ」-に分類している。

「社会情報としてのうわさ」とは、ある特定の社会状況の中で顕在化し、現実起こっている（起こった）状況を説明したり解釈しようとするうわさである。この種類のうわさは「流言」とも呼ばれる。Shibutani（1985）は流言を「あいまいな状況に巻き込まれた人々が、自分たちの知識を寄せ集めることによって、その状況について有意味な解釈を行おうとするコミュニケーションであり、こうしたコミュニケーションが繰り返生じたときこれを流言と呼ぶ」と定義している。

「おしゃべりとしてのうわさ」とは、他人に関するもので、身近な集団の中でしか意味を持たず、内容が社会情報に比べてローカルなものである。この種類のうわさは「ゴシップ」とも呼ばれる。川上（1977）はゴシップを「ある人のもっている資質やすでに行った行動についてその場で交わされる意見」だとしている。

「楽しみとしてのうわさ」とは、語ること自体に目的があり、一見すると何も起こっていない状況の背後で、実は事件が起こっているというようなストーリー性が含

*関西学院大学文学部4年生

**関西学院大学文学部教授

1) 本研究は関西学院大学人を対象とする行動学系研究倫理委員会の承認を受けて実施した（2018-08）。

まれるものである。この種類のうわさは「都市伝説」とも呼ばれる。Difonzo (2011) は都市伝説を「いかにもありそうな、不思議な、痛快な、あるいは怖い出来事の話」で、「巧妙という縦糸と、娯楽という横糸によって織り上げられ、聞くものを物語に引き込んで楽しませる」ものだとしている。

これらの3種類のうち、本研究で注目するうわさは、「楽しみとしてのうわさ」に該当すると考えられる。

うわさの伝達に関する要因

このように、一口にうわさと言ってもその社会的機能は多様である。社会心理学では、うわさがなぜ「うわさ」たり得るのか、すなわちある特定のトピックやストーリーが人々の間を広くあるいは急速に伝播する要因に関する研究が数多くなされてきた。もっとも有名かつ簡潔なのは Allport & Postman (1946) によるうわさの基本公式と呼ばれるものである。彼らは、うわさの流通量 R は、そのうわさの重要性 i と曖昧さ a の積によって決まる ($R \sim i \times a$) と考えた。この公式に従えば、あるトピックやストーリーの重要性が高く、加えて曖昧さが高いと判断されれば、うわさとしての伝播性は相乗的に高まることになる。

重要性と曖昧さの判断基準に影響する要因として数多くの研究が言及しているのが「不安」である(例えば、Rosnow (1988) や Kimmel & Keefer (1991), Walker & Beckerle (1987) など)。Rosnow (1988) は過去の研究のレビューから、うわさの伝達に個人の内的状態としての不安の程度が影響しており、特性あるいは状況的に不安の高い個人はうわさを伝達しやすいことを指摘している。また Kimmel & Keefer (1991) はエイズに関するうわさの伝達と受容に関連する情動的、認知的要因を調査し、うわさの内容による不安喚起が伝達を促進させると指摘している。さらに Walker & Beckerle (1987) は不安を喚起させる状況がうわさの伝達を促進させると指摘している。つまり、様々なレイヤーで高い不安がうわさの伝達されやすさに影響しうることが指摘されている。

これらの先行研究をふまえて、本研究では不安に着目する。具体的には、不安を喚起させるような内容を含むうわさに注目し、それに類似する状況に接触することが個人の不安の程度に与える影響を検討するとともに、伝達しやすさとの関わりについても検討する。

本研究の概要

本研究では、不安を喚起させるようなうわさの内容と類似する状況に遭遇した際の個人の感情状態の変化とそのうわさの伝達意図について実験室実験によって検討する。うわさに関する社会心理学研究は数あるが、本研究が採り上げる「うわさと類似する状況との遭遇」という

場面に着目した先行研究は見当たらなかったため、敢えて仮説を設けることをせず、探索的な検討を行うことで研究の端緒とする。

実 験

方法

実験日時と場所および状況

2018年6月22日から7月20日に、関西学院大学F号館地下実験室11にて実施した。実験実施状況を図1に示す。参加者の両横はパーティションで区切られており、隣の机の様子は見えない状態であった。右側のパーティションと正面の壁の間にビデオカメラを配置し、参加者の実験での様子を記録した。パーティション間の距離は80cmであった。

実験条件

本実験では、参加者にうわさを記述した文章を読ませた上で、読ませたうわさの内容と事後に起こる状況が類似する群(以下、「実験群」とする)と類似しない群(以下、「統制群」とする)の2群を設定し、参加者をどちらか1群にランダムに割り当てた。

参加者

関西学院大学の学生で、日本語を母語とする者47名(男性7名、女性40名)を対象とした。参加者の平均年齢は19.43歳で、年齢範囲は18歳から22歳(SD 1.08)であった。なお、実験操作により喚起される不安が参加



図1 実験実施状況

者への過度な負担になることを避けるため、特性不安を基準として参加者をスクリーニングした。参加希望者には事前に清水・今榮（1981）の特性不安尺度への回答を求めた。尺度は20項目あり、4件法（1「決してそうではない」～4「いつもそうである」）で尋ねた。全項目の回答値の合計が59点以上だった者は、特性不安が高いとみなして対象から除外した。基準値は、宮本（2012）を参考にして、清水・今榮（1981）で得られた大学生の平均得点48.8点に標準偏差10.0点を足した得点（58.8点）を上回るものを設定した。

実験装置

脈拍計としてPolar社製A370を使用した。この脈拍計は手首に装着し、盤面の背面のセンサーで毎秒ごとの脈拍数を計測するものであった。ビデオカメラはPanasonic社製HC-V550Mを使用した。

手続き

実験開始前

実験は実験室に参加者を個別に来室させて実施した。教示の段階で参加者に、「うわさの面白さ評定と読解中の個人状態」について検討することが目的だと伝えた。参加者に非利き手の手首に脈拍計を着けさせた。まず、安静状態の脈拍数を計測した。参加者を椅子に深く腰掛けさせ、目を閉じてゆっくりと深呼吸するように伝えた。計測時間は10分間であった。実験者は計測中は実験室から退出していた。10分経過後、実験者は実験室に再入室し、安静状態の脈拍数の測定を停止した。

第1フェーズ

安静状態の脈拍数計測終了後、実験を開始した。実験は3つのフェーズに分かれていた。第1フェーズ開始前に参加者に質問紙を配布し、次の6点を伝えた：①うわさは3つあること、②うわさを一言一句正確に覚える必要はないが、大筋の内容は理解できるように文章を読むこと、③文章は何度でも読み返すことが可能だが、開始から15分が経過した際には実験者が参加者に声をかけること、④3つのうわさの内容を十分に理解したら実験者に声をかけること、⑤もし読んでいる途中で何か不可解な点があれば実験者に声をかけること、⑥実験者から指示があるまで、第2フェーズに着手しないこと。これらの教示の終了後、第1フェーズ開始前に実験中の脈拍の測定を開始し、実験終了まで継続した。

第1フェーズでは「関学に伝わるうわさ」として3つの物語を読ませた。ここで読ませる物語の内容を操作した。統制群におけるうわさは「七夕ジンクス」、「おかしな採点方法」、「トイレのカギ」に関するものだった。実験群で読ませるうわさの内容は、「七夕ジンクス」、「おかしな採点方法」は統制群と同じで、3つ目が「受け取ってはいけない白紙」（以下、「白紙物語」とする）に関するもので、統制群と異なっていた。「白紙物語」の概

略は「ある教員が授業中に配布したレジュメに白紙があり、その白紙を見た学生たちが次々と昏倒して教室がパニック状態になり、最後に白紙を見た教員も昏倒する」というものであった。

第2フェーズ

第2フェーズでは開始前に次の5点を伝えた：①第1フェーズで読んだうわさに関する質問に答えること、②回答中に先ほど読んだうわさを読み直さないこと、③最後の質問に答え終わったら次には進まず実験者に声をかけること、④開始から15分が経過した際には実験者が参加者に声をかけること、⑤もし読んでいる途中で何か不可解な点があれば実験者に声をかけること。

うわさに関する質問項目は、3つのうわさそれぞれについて、①既知か否か（はい/いいえで回答）、②面白さ（0「全く面白くなかった」～100「とても面白かった」で回答）、③伝達意図（各うわさを「どの程度他人に伝えたいと感じるか」について、1「全く感じない」～4「非常に感じる」で回答）を問うものであった。ただし、両群ともに伝達意図を問う質問の直前からすべて白紙の質問紙を配布した。この操作により、実験群においては直前に読んだ「白紙物語」に記述されていた内容が現実には起きた、という状況が作り出される。質問紙の不備に関する参加者からの申告があれば、実験者は自分のミスだと説明して、質問紙を回収し、改めて不備のない質問紙を配り、伝達意図を問う質問から回答するよう伝えた。なお、参加者からの申告がなければ、回答開始から15分経過時点で実験を終了することにしていたが、全員から申告があり該当者はいなかった。

第3フェーズ

第3フェーズでは開始前に次の4点を伝えた。①参加者自身に関する質問に答えること、②最後の質問を答え終えたら実験者に声をかけること、③開始から15分が経過した際には実験者が参加者に声をかけること、④もし読んでいる途中で何か不可解な点があれば実験者に声をかけること。

ここでは清水・今榮（1981）の状態不安尺度を回答させた。尺度は20項目あり、4件法（1「全くそうでない」～4「全くそうである」）で尋ねた。

質問への回答が終了した時点で実験中の脈拍の測定を停止した。実験終了後、参加者に白紙を見て感じたことや考えたことを尋ね、デブリーフィングを行って、改めて実験参加への同意を得た。なお、実験中の状況はすべてビデオカメラで録画した。実験全体に要した時間は30分程度であり、参加報酬として実験参加証・クリアファイルをそれぞれ1枚ずつ交付した。

独立変数と従属変数

独立変数は質問紙の第1フェーズにおける3番目のう

わさの内容であった(統制群:「トイレのカギ」, 実験群:「白紙物語」)。従属変数は脈拍数(安静時・白紙遭遇時), うわさの伝達意図(統制群:「トイレのカギ」, 実験群:「白紙物語」)の項目への回答, 状態不安尺度得点であった。脈拍数と状態不安尺度得点は感情状態の変化を測定する指標, 伝達意図は行動への影響を測定する指標である。

結果

脈拍数

安静時の脈拍数は, 実験者が測定開始の合図をしてから10分間の毎秒ごとの脈拍数を抽出し, その平均値を算出した。統制群が75.89 (SD 10.18), 実験群が80.05 (SD 12.41)であった。白紙遭遇時の脈拍数は, 参加者が第2フェーズの1ページ目をめくり, 白紙が映像に映ってから参加者が実験者に声をかけるまでの毎秒ごとの脈拍数を抽出し, その平均値を算出した。統制群が75.75 (SD 8.08), 実験群が79.89 (SD 11.34)であった。

事前に読んだ, 不安を喚起するうわさの状況に遭うことが個人の心理状態に与える影響を検討するために, 混合2要因(群: 統制群と実験群の2水準・測定タイミング: 安静時・白紙遭遇時の2水準)の分散分析を行った結果, 群の主効果 ($F(1,45) = 1.95, p = .17, \text{偏}\eta^2 = .04$), 測定タイミングの主効果 ($F(1,45) = 0.03, p = .85, \text{偏}\eta^2 = .001$), 両者の交互作用 ($F(1,45) = 0.00, p = .99, \text{偏}\eta^2 = .00$) は有意ではなかった。

状態不安尺度得点

状態不安尺度得点について, 分析に使用するための合成変数を作成した。清水・今栄(1981)に従い, 10項目を逆転処理した後に全20項目に対する回答値の合計を算出した。その際, 得点が高いほうが状態不安が高いことを示すようにした。統制群が37.50 (SD 5.05), 実験群が45.19 (SD 8.73)であった。なお, 無回答の項目があった参加者1名については, 清水・今栄(1981)に基づき, 該当する参加者が反応した項目の平均得点を算出し, それに20を乗じた値を切り上げて整数にしたものを状態不安尺度得点とした。

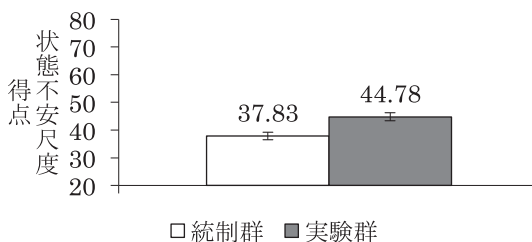


図2 群による状態不安尺度得点の違い(エラーバーは標準誤差)

群ごとの状態不安尺度得点を図2に示す。特性不安を共変量とする参加者間1要因の分散分析を行った結果, 差が有意であった ($F(1,44) = 11.79, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .21$)。以上から, 実験群は統制群に比べて不安が高いことが示された。

伝達意図

参加者に読ませたうわさ(実験群「白紙物語」, 統制群「トイレのカギ」)の伝達意図の平均値を図3に示す。対応のない2つの平均値に関する等分散を仮定しないWelchの検定を行った結果, この差は有意ではなかった ($t(42.35) = 1.12, p = .27, d = .32$) が, 効果量は比較的大きかった。

追加分析

実験操作の行動への影響について, 当初から測定し分析することを計画していた従属変数に加えて, 参加者が実験者に質問紙に白紙があることを伝えるまでの時間(以下, 申告時間とする)についても群間差を検討した。参加者が質問紙に白紙があることを申告する行為は, うわさを実験者に伝達する行為ではない。しかし, 参加者が実験者の指示とは異なる自発的な行動を起こすことには何らかの意図があると考えてよいだろう。そこで, その意図に事前に読んだうわさの内容による違いがあるかどうかを検証した。

両群において, 第2フェーズで参加者が白紙を見てからそれを実験者に伝えるまでの秒数を抽出し, その平均値を算出した。群ごとの申告時間を図4に示す。対応のない2つの平均値に関する等分散を仮定しないWelchの検定を行った結果, この差は有意ではなかった ($t(40.55) = 0.98, p = .33, d = .29$)。しかし, 効果量は比較的大きかった。

さらに, 伝達意図との関連を検討するために, 群ごとに相関分析を行った。散布図を図4・5に示す。実験群では $r = .36$ と正の相関が見られた一方で, 統制群では $r = -.05$ と無相関であった。この傾向は, 申告時間が60秒を超えた参加者を外れ値と見なして削除した場合も変わらなかった(実験群 $r = .63$, 統制群 $r = .16$)。

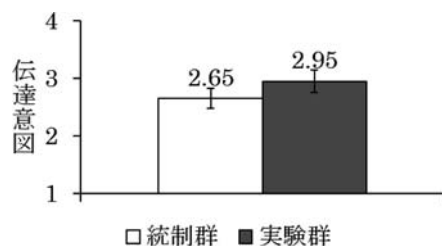


図3 群による伝達意図の違い(エラーバーは標準誤差)

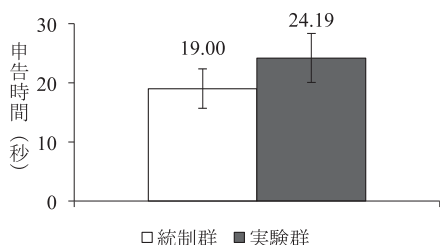


図4 群による申告時間の違い (エラーバーは標準誤差)

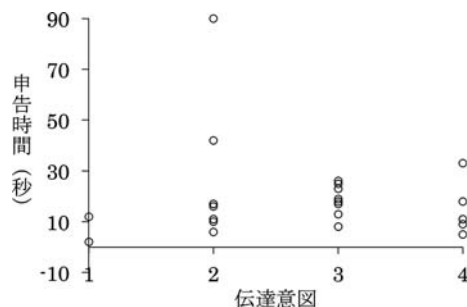


図5 統制群における申告時間と伝達意図との散布図

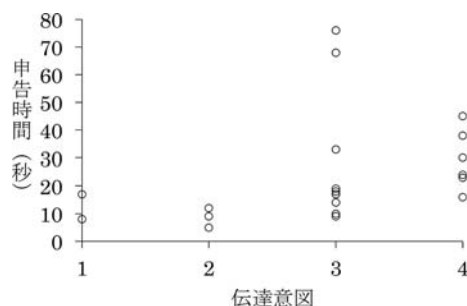


図6 実験群における申告時間と伝達意図の散布図

考察と課題

本実験では、不安を喚起させるようなうわさの内容と類似する状況に遭遇した際の、個人の感情状態の変化とそのうわさの伝達意図について検討した。脈拍数・状態不安尺度得点に関する分析結果から、不安を喚起させるようなうわさと類似する状況への遭遇が個人の不安を高める可能性が示された。また、伝達意図に関する分析結果から、不安を喚起させるようなうわさと類似する状況への遭遇が個人の行動に影響を与える可能性が示された。また、うわさと類似する状況に遭遇した際の伝達意図が高いほど、それを実験者に申告するまでにかかる時間は長いことが示された。

実験実施後に追加した申告時間の分析結果について見

ると、群間差は有意ではなかったが実験群の方が長い傾向にあり、また伝達意図との相関は実験群においてのみ正であった。つまり、うわさと類似した状況に接触した上に、そのうわさの伝達意図が高い参加者の方が、実験者とその状況（白紙の存在）を伝えるまでに時間を要したことになる。Walker & Beckerle (1987) は、不安を強く喚起させる状況に置かれた参加者がそうでない参加者よりもうわさを伝達するまでの時間が短くなることを示したが、本研究の申告時間において見出されたのはこれとはむしろ逆方向の傾向であった。

なお、本実験では伝達意図は実験操作後のみに測定したので、そもそも2つのうわさ間で伝達意図を高める程度に差があり、それが測定結果に影響を及ぼしていた可能性は否定できない。そのため、得られた結果が「トイレのカギ」と「白紙物語」が本来持つ伝達意図によるものなのか、うわさ実現の効果によるものなのかを結論づけるためには、2つのうわさが本来持つ伝達意図に関する追加調査を行う必要がある。

追加調査

前述の実験結果が、実験操作によるものか、2つのうわさの本来的な差異によるものかを明らかにするために、「トイレのカギ」と「白紙物語」が本来持つ伝達意図に関する追加調査を行った。

調査日時と場所

本調査は2018年10月24日に関西学院大学H号館301号室にて心理科学基礎統計の講義内で実施した。

参加者

回答者は関西学院大学の学生181名（男性37名、女性143名、未回答1名）で、平均年齢は18.97歳、年齢範囲は18歳から26歳（SD 1.07）であった。

手続き

本調査はオンライン調査票構築サイト Qualtrics によって作成され、URL は調査実施の当日に参加者にメールで配布された。

「トイレのカギ」と「白紙物語」のどちらかを提示した後にうわさに関する次の5種類の質問項目に回答させた：①内容に関する確認問題（3択から選択）②既知か否か（はい/いいえで回答）③面白さ（1から100で回答）④内容に関する質問項目（1「全くそうではない」～4「非常にそうである」で回答。項目内容は「このうわさは、面白い」、「このうわさは、情報源がわからない」など9項目で、竹中・松井（2007）を一部変更）⑤伝達意図（1「全く感じない」～4「非常に感じる」で回答）。

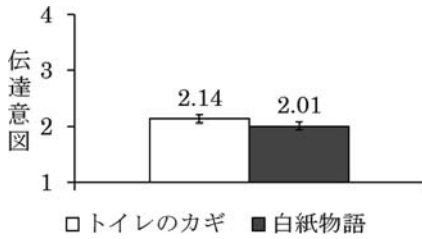


図7 「トイレのカギ」と「白紙物語」の本来の伝達意図の違い（エラーバーは標準誤差）

参加者のうち、本実験に参加していた者24名と参加について覚えていない・わからないと回答した者4名、母語が日本語以外の者7名は分析対象から除外した。また、Satisfice（三浦・小林，2015）によるデータの歪みを最小限にするため、質問項目①に誤答した17名も除外した。結果的に、分析対象者は136名（男性24名、女性111名、未回答1名）となった。なお、実験における伝達意図の差の検定で得られた効果量（ $d=0.33$ ）を得るために必要なサンプルサイズは73.58名であった（Rのパッケージ `pwr`、関数 `pwr.t.2.n.test` を用いて、有意水準0.05、検定力0.80として算出）。

結果と考察

「トイレのカギ」と「白紙物語」の伝達意図の平均値を図5に示す。対応のある2つの平均値に関する等分散を仮定しないWelchの検定を行った結果、「トイレのカギ」の伝達意図が「白紙物語」に比べて有意に高かった（ $t(135.00)=2.32, p=.02, d=.17$ ）。本実験における伝達意図は「白紙物語」の方が高かった一方で、「トイレのカギ」が持つ本来の伝達意図は「白紙物語」に比べて高いことが示された。したがって、実験における伝達意図の差は実験操作によるものだと考えられる。このことから、うわさと類似する状況への遭遇はそのうわさの伝達意図を高める可能性が示唆された。

総合考察

本研究の目的は、不安を喚起させるうわさの内容と類似する状況に遭遇することが、個人の感情状態と行動にどのように影響するのかについて探索的に検討することであった。そのために、参加者に読ませたうわさと類似する状況を作り出す実験を考案・実施した。うわさと類似する状況との遭遇、という観点がこれまでのうわさ研究にないことから、本研究は仮説を設定せず、探索的な検討を行った。その結果、参加者の状態不安と伝達意図が高くなることが示された。

まず、個人の感情状態の変化について考察する。安静時と白紙遭遇時、また群間での比較において、脈拍数に差異はなかった。しかし、状態不安尺度得点が統制群に

比べて実験群で増加していた。これらの結果は、不安を喚起させるうわさの内容と類似する状況への遭遇が個人の不安を上昇させることを示唆している。

次に、行動への影響について考察する。まず、統制群で読ませた「トイレのカギ」と実験群で読ませた「白紙物語」の伝達意図は後者の方が高く、群間の差の検定は統計的に有意ではないものの、効果量は比較的大きかった。追加調査により、それぞれのうわさが本来喚起する伝達意図は「白紙物語」より「トイレのカギ」の方が高いことが示唆されたため、この結果は「白紙物語」の伝達意図が実験操作によって高められたことによるものであると考えられる。

ただし、付加的に検討した白紙の存在を実験者に申告するまでの時間は、統制群より実験群の方が長く、さらに、実験群において伝達意図の高い参加者の申告時間の方が長い傾向が見られた。これはWalker & Beckerle（1987）の知見と逆行すると同時に、伝達意図が高いほど伝達時間は短いだろうという直感にも反する結果である。そこで次節では、今回刺激として用いた「白紙物語」の内容が申告時間に影響を与えていた可能性について詳しく言及する。

本研究の問題点

まず、「白紙物語」の内容の問題点について述べる。このうわさは「講義中の白紙によるトラブル」を「教員」の視点で描写していた。しかし本研究の対象者は大学生であった。そのため、「白紙物語」の結末のような事態（白紙を手渡された教員が昏倒する）の実現を避けようとした、つまり、実験室内では教員の立場に類似する実験者に白紙の存在を伝えることで、実験者に災禍が及ぶことを危惧して申告を躊躇した可能性もある。実際、内省報告でこのことに言及した参加者もいた。このことは、「白紙物語」を読んだ実験群において伝達意図と申告時間に正の相関が見られた一方で、統制群では無相関だったことから傍証される。つまり、実験群において申告までの時間が長く、さらに伝達意図の高さがその傾向を強めたことには、「白紙物語」の内容が影響している可能性がある。「白紙物語」を参加者と同じ属性（大学生であれば「学生」）視点の物語にすれば、Walker & Beckerle（1987）と同様の結果が得られるかもしれない。

また、本研究で示されたのは「うわさと類似する状況への遭遇が伝達意図を高める」ことであり、実際の伝達行動については測定できていない。実際の伝達行動を測定するためには、本研究で行ったのと同様の手続きで参加者にうわさを読ませ、その内容を評価させた後に、参加者には実験が終了したと教示した上で実験とは無関係な第三者と雑談させる状況を作ることが考えられる。第

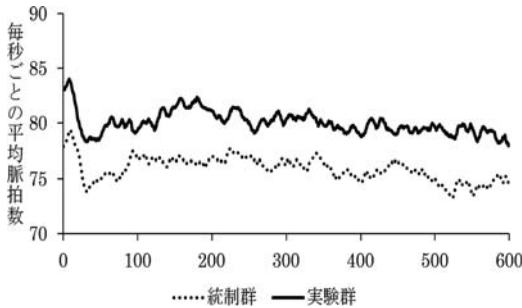


図8 安静時脈拍数の推移（推移の表示を明確にするため縦軸の最小値を70, 最大値を90としている）

三者に先に読んだうわさについて話すことを伝達行動と定義し、出現の有無と出現までの時間を測定することにより、より具体的な行動指標である伝達行動とうわさと類似する状況への遭遇との関連を検討できるだろう。

参加者の脈拍数に安静時・白紙遭遇時及び条件間で差が見られなかったことについては、安静時脈拍数の測定時の環境に問題があった可能性が考えられる。両群における10分間の安静時脈拍数の推移を図7に示す。計測開始直後に一旦大きく低下した後、200秒付近に向けて平均脈拍数が上昇していることがわかる。つまり、実験室に入った直後の緊張から一旦安静状態になったものの、それが維持されなかったことになる。これは、安静時脈拍数の測定時の環境に2つの問題点があったことが理由と考えられる。1つ目は、安静時の脈拍数の測定の際、実験室の隣にあるトイレの水洗音に参加者が不安を感じ、安静時の脈拍数が上昇した可能性である。2つ目は、目を閉じたまま1人で10分間実験室内にいるという状況が参加者に不安を喚起させた可能性である。したがって、今後安静時の脈拍数を計測する際は、参加者にヘッドホンを着用させたり遮音性の高い実験室で実施したりすることや、計測時間を短くすることが必要だと考えられる。

結 論

本研究は、不安を喚起させるうわさと類似する状況への遭遇が個人の感情状態と行動に与える影響を探索的に検討した。その結果、うわさに類似する状況への遭遇は個人の状態不安を高め、伝達意図を高める可能性が示された。今後は、実際の伝達行動を含む様々な行動にうわさと類似する状況が与える影響を検討することが求めら

れる。

引用文献

- Allport, G. W., & Postman, L. (1946). An analysis of rumor. *Public Opinion Quarterly*, 10, 501-517.
- Difonzo, N. (2008). *The watercooler effect: A psychologist explores the extraordinary power of rumors*. New York: Avery. (ディフォンゾ, N. 江口泰子 (訳) (2011). うわさとデマ ココミの科学 講談社)
- 川上善郎 (1994). エイズとうわさ: うわさへの接触 うわさの伝達を促進する要因について 情報研究, 15, 11-34.
- 川上善郎 (1997). うわさが走る 情報伝播の社会心理 サイエンス社
- Kimmel, A. J., & Keefer, R. (1991). Psychological correlates of the transmission and acceptance of rumors about AIDS. *Journal of Applied Social Psychology*, 21, 1608-1628.
- 三浦麻子・小林哲郎 (2015). オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究 社会心理学研究, 31, 1-12.
- 宮本 俊 (2012). 不安を喚起させる情報が情報獲得・共有行動に及ぼす影響—心拍数を指標とする実験的検討— 関西学院大学文学部総合心理科学科心理科学専修 2012 年度卒業論文
- Rosnow, R. L. (1988). Rumor as communication: A contextualist approach. *Journal of Communication*, 38, 12-28.
- Shibutani, T. (1985). *Improvised news: A sociological study of rumor*. Indianapolis: Bobbs-Merrill. (シブタニ, T. 広井 脩・橋元良明・後藤将之 (訳) (1985). 流言と社会 東京創元社)
- 清水秀美・今榮国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 竹中一平・松井 豊 (2007). 大学生の日常会話におけるうわさの類型化—内容属性の評価の観点から 筑波大学心理学研究, 34, 55-64.
- Walker, C. J., & Beckerle, C. A. (1987). The effect of state anxiety on rumor transmission. *Journal of Social Behavior and Personality*, 2, 353-360.